

国立国語研究所学術情報リポジトリ

総合雑誌に見る名詞「状態」の用法：約100年を隔てた2誌を比較して

著者	新屋 映子
雑誌名	日本語科学
巻	24
ページ	55-76
発行年	2008-10-30
URL	http://doi.org/10.15084/00002203

総合雑誌に見る名詞「状態」の用法

——約100年を隔てた2誌を比較して——

新屋 映子
(桜美林大学)

キーワード

「状態」、単純語、複合語、文末名詞、テキスト的機能

要 旨

総合雑誌『太陽』の1895年、1901年、1909年発行分と総合雑誌『アエラ』2005年1月1日から2007年9月30日までの発行分を資料として、「状態」という一つの抽象名詞について、語彙的、統語的、語用論的態様を通時的に比較すると同時に、現代の中心的な用法について考察した。調査・分析の結果、以下のような結論を得た。『太陽』と比較して『アエラ』では、①単純語としての「状態」が減少し、複合語の後項要素となる率が高くなっている。同時に、複合語前項要素は極めて多様化している。②連体修飾部も複合語の前項要素も主名詞「状態」と同格関係にあるものの率が高くなっており、「状態」は前接語句の範疇表示的な性格を強めている。③統語的には名詞本来の機能である格成分よりも述語、特に文末名詞として機能するものが増えている。それらは命題表示に必須の成分ではなく、機能語的な性質が強くなっている。④「状態」を述語とする文は出来事を表すテキストの中で一定の表現性、特にネガティブな情報を提供する説明文として機能する傾向が顕著になっており、文末における「状態」の使用はこうした表現性に支えられている。

1. はじめに

本稿は、「状態」という一つの名詞をめぐって、その語彙的、統語的、語用論的態様を通時的に比較・考察しようと試みるものである。

単語は文中で固有の語彙的意味と文法的機能を担って存在する。同一の品詞に分類されるものであっても文中におけるあり方は個々の単語の持つ性質により様々であり、その事情は類義関係にある単語どうしても変わらない。しかし単語の意味や機能は固定されているわけではなく、歴史の中で大きく変質を遂げるものも少なくない。筆者は現代の言語資料を調べているとき、「状態」という名詞が名詞本来の統語機能である格成分としての用法よりも、述語として用いられていることが多いのに気が付き、そうした振る舞いがいつからのことであるのかに関心を持った。そこで現代語の資料と、現代からは年代的に約100年の開きがある『太陽コーパス』を用いて両時期の「状態」の用法を比較してみようと思ったのが、本稿を起こしたきっかけである。次節以下、両時期の資料の統計結果を比較することによって、「状態」の用法の変遷を観察し、最後に現代における「状態」の中心的な用法について考察することとする。なお今後、調査対象とする資料・ジャンル・時期等の範囲を広げ、より綿密な調査を行いたいと思っている。今回の調査は

予備的なものであることをお断りしておく。

本稿のデータは以下の2種類のコーパスによる。

- 〈1〉 国立国語研究所作成 CD-ROM『太陽コーパス』 1895 年, 1901 年, 1909 年発行分
- 〈2〉 『アエラ』 2005 年 1 月 1 日から 2007 年 9 月 30 日までの発行分。朝日新聞社のオンライン記事データベース『聞蔵』による。

『太陽』は月刊総合雑誌, 『アエラ』は週刊総合雑誌である。(以下, 本稿で資料とした範囲の『太陽』『アエラ』を単にそれぞれ『太陽』『アエラ』と称する。『太陽』では旧仮名・旧字体が用いられているが, 図表の中では新仮名・新字体を用いる。用例及び引用文中の下線は筆者による。)

資料における「状態」の総出現数は, 『太陽』が 871 例, 『アエラ』が 1035 例であった。『太陽』には「状態」のほかに「情態」という表記も併用されていたが, これは「状態」の異表記として扱うこととする¹。『アエラ』には「情態」は見られなかった。なお, 総出現数のうち, 見出し又は独立語文(南不二男 1993)中の「状態」は調査対象から除くこととする。さらに『アエラ』には著作権の関係で本文を見ることのできないものがあるため, 本研究の調査対象となる「状態」は『太陽』で 865 例, 『アエラ』で 929 例となる。

2. 「状態」の語構成 ―単純語か複合語後項か―

資料に現れた「状態」の大半は単純語として使用されているが, 「健康状態」「飽和状態」のように複合語の後項要素として用いられているものも多い。図 1, 表 1 はデータ中の「状態」が単純語として用いられているか複合語の構成要素として用いられているかを調査した結果である。『太陽』には 138 例, 『アエラ』には 359 例の, 「状態」を後項要素とする複合語が見られた²。なお, 図表からは除いたが, 「状態変動」という, 「状態」を前項要素とする複合語が『太陽』に 1 例あった。

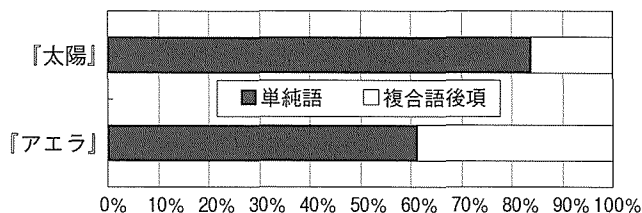


図 1 「状態」の単純語 / 複合語構成要素の割合

表 1 「状態」の単純語 / 複合語構成要素の割合

	『太陽』	『アエラ』
単純語	726	570
複合語後項	138	359

図 1, 表 1 から明らかなように, 『太陽』における「状態」は大半が単純語としての使用で, 複合語の後項要素として使用されているのは約 16%であるのに対し, 『アエラ』では複合語の後項要素としての「状態」が約 39%と『太陽』の約 2.4 倍の使用率であり, 「状態」の複合語化の

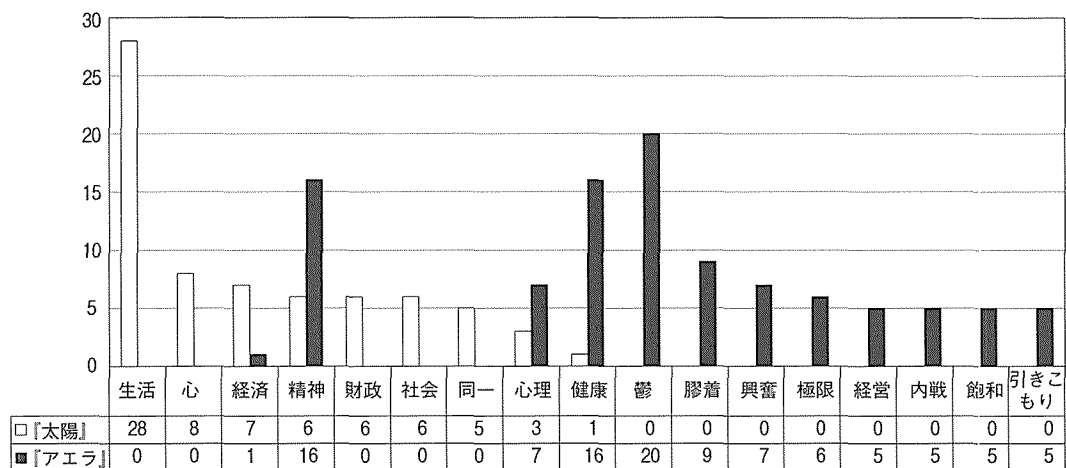
割合が高く、換言すれば自立語としての割合が低くなっている。2.1節で「状態」を後項とする複合語について、2.2節で単純語としての「状態」について見ることにする。

2.1. 「状態」を後項とする複合語

2.1.1. 「状態」を後項とする複合語の種類

「状態」を後項とする複合語の前項要素とはどのようなものであろうか。図表1は両資料の使用度数5以上の複合語を取り上げ、図表化したものである³。データテーブルの語彙には複合語の前項のみを表示する。

図表1 「状態」を後項とする複合語の出現数



図表1から分かるように、『太陽』と『アエラ』とでは共通の複合語が少ない。両者に共通しているのは、僅かに表2の5語のみであり、そのうちの3例も一方が1例のみという重なりが薄いものである。

表2 『太陽』と『アエラ』に共通する複合語

	『太陽』	『アエラ』
精神状態	6	16
健康状態	1	16
心理状態	3	7
昏睡状態	1	2
経済状態	7	1

「状態」を後項とする複合語の異なり数を見てみると、『太陽』が57、『アエラ』が211で、約1対3.7である。延べ数は『太陽』138、『アエラ』359で、約1対2.6であるから、その差に比べると、異なり数の差は大きい。『太陽』と比較して『アエラ』では複合語化の割合が高くなっているだけでなく、複合語の種類も多くなっているわけである。また、『太陽』には「教育状態」「(同國文學の)最近状態(の如何なるや)」「(如何なる)心状態(を有たざるべからざる乎)」「(其)實際状態(に適應し)」「宗教状態」「危険状態」「陋劣状態」「運命状態」「真状態」「自家状態」「活状態」「心意状態」「悪状態」「主權状態」「悪辣状態」などの

ように、現代では余り目にすることのない複合語も少なくない。同じく「状態」を後項要素としていても『太陽』と『アエラ』とでは語彙的にかなり異なっていることが分かる。

2.1.2. 「状態」を後項とする複合語の前項 一字数、字種、語種―

「状態」を後項とする複合語の前項の字数を見てみると、『太陽』の場合、前項が全部で 261 字、1 語平均約 1.9 字であるのに対し、『アエラ』の場合、前項が全部で 1023 字、1 語平均約 2.9 字であり、『太陽』に比べて『アエラ』は約 1.5 倍の字数を持つことになる。『太陽』における前項には 2 字を超えるものはないのに対し、『アエラ』には「鬱状態」「躁状態」という前項が 1 字のものもあるが、「アートの駄菓子屋さん状態」「お祭りワッショイ状態」「低価格据え置き状態」「ひとりロハス状態」「おひとりさま状態」「死んだマグロ状態」のように長いものも少なくない。『『自滅のもぐらたたき』状態』『『一見さんお断り』状態』や「ひとり編集部」状態」「“サンドバッグ”状態」のように前項がかぎ括弧や引用符でマークされているものもあれば、「『右バブル・ひび割れ』状態」のようにナカグロ「・」を含むものもある。また、前項の字種を見ると、『太陽』で漢字以外のものは「ガス状態」のみであるのに対し、『アエラ』では漢字、平仮名、片仮名が入り混じり、語種も和語、漢語、混種語とさまざまである。『太陽』の複合語のシンプルなのと比べ、『アエラ』のそれは実に多種多様であり、同じく「状態」を後項とする複合語とは言え、『太陽』と『アエラ』では一見して相当の隔たりのあることが分かる。林（1982）は、「私たちの言語生活の中では、通常の意味での単語のほかに、臨時に、その場限りでの一単語というものが生じている。特に新聞記事の中には、それが多く見られる。」とし、これを「臨時一語」と呼んでいる（p.15）。『アエラ』における「状態」を後項とする複合語にはまさに「臨時一語」が多い⁴。

2.1.3. 「状態」を後項とする複合語の意味構造

本節では「状態」を後項とする複合語の意味構造を比較する。「状態」を後項とする複合語の前項要素と後項要素「状態」との意味関係には以下のような 3 類が認められる。

- ①「休戦状態」（太陽）のように、前項が「状態」の詳細を表し、前項が「状態」の下位表現、「状態」が前項の上位概念という関係にあるもの。前項と後項のこうした意味関係を「同格」と呼ぶことにする。
- ②「緊急状態」（太陽）のように、前項が「状態」の性質や「状態」に対する評価を表すもの。前項と後項のこうした意味関係を「属性」と呼ぶことにする。
- ③「心理状態」（太陽）のように、前項と「状態」が素材的なレベルで関係しているもの。「状態」が前項の指示対象の側面としての“状態”であり、前項と「状態」が「（前項）の状態」と言えるような広義所属関係にあるものである。前項と後項のこうした意味関係を「素材」と呼ぶことにする。

「状態」を後項とする複合語における前項と後項「状態」の意味関係を調べた結果が図 2、表 3 である。

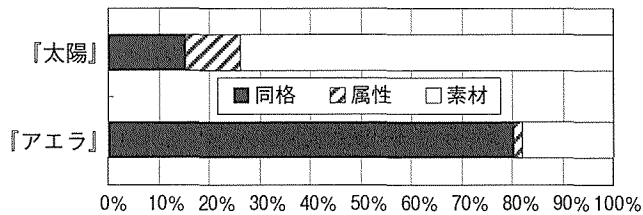


図2 「状態」を後項とする複合語の前項と後項の意味関係

表3 「状態」を後項とする複合語の前項と後項の意味関係

	『太陽』	『アエラ』
同格	21	288
属性	15	6
素材	102	65

『太陽』では「状態」を後項とする複合語の約74%が「素材」即ち「～の状態」「～に関する状態」といった素材関係的な意味構造を持つのにに対し、『アエラ』では約80%が「同格」即ち「～である状態」「～という状態」といった意味構造を持ち、両資料の差は大きい⁵。

『アエラ』で「同格」の意味構造を持つ複合語は、「順番待ち状態」「ワーキングプア状態」「全身麻痺状態」「ネタ切れ状態」「時差ぼけ状態」「母子依存状態」「空き待ち状態」「宣戦布告状態」「学級崩壊状態」「家庭内別居状態」「ゼロ金利状態」「プレ更年期状態」と、実にバラエティに富む。その中の63例（「同格」の約22%）は、次の(1)–(3)のように前項が比喻表現である。

- (1) 赤ちゃんを抱いた「カンガルー状態」でお迎えに来るお母さんも多いし、長男(3)のクラスでは毎月のように弟や妹が生まれた子のお祝い会が催される。(アエラ 2006.12.4)
- (2) 長男の弁当、みんなの朝食、夕食の下ごしらえと、3食同時進行で調理するので、お弁当屋の女将さん状態になる。(アエラ 2006.6.19.)
- (3) そもそもこの騒動、メディアも含めた世間による『1億総小姑状態』とでもいうべきパッシングの様相を呈し始めています。(アエラ 2007.9.3.)⁶

『アエラ』の複合語には前項自体が複合語構成になっているものや、しかもそれが「低価格据え置き状態」→「[低価格で据え置き]状態」, 「管理不能状態」→「[管理が不能]状態」, 「一見さんお断り状態」→「[一見さんはお断り]状態」, 「育児困難状態」→「[育児が困難]状態」のように前項内部に論理的な[補語–述語]構造を含んでいるものなど、連体部の重い構造のものが多く、これらの連体部は単語という形態的な制約の中にあって命題的な意味構造に連続している。林(前掲書)は、「[知事の口約「マイタウン東京」構想を進めている都が]や「知事の“短期決戦”方針が, 「流血の事態」を招く危険がある」における「マイタウン東京」や「短期決戦」は、それぞれ「構想」「方針」の内容で、間に「との」「という」のようなつなぎのことは入れることができる。こういう「構想」「方針」などのことは「事情」「情勢」「見通し」などの語とともに、形式名詞「こと」に似た性格をもち、情報を加えるよりも、名詞のかたまりを作るための括りの働きを第一とするものである。」と述べている(p.19)。林の指摘するこうした意味・機能は複合語後項としての「状態」にもあてはまり、後述するが、同格関係にある連体部を伴う単独語の「状態」にも共通する。一方『太陽』の、「状態」を後項とする複合語には『アエラ』のような重構造の連体部や比喻表現は見られない。『アエラ』では「状態」が非常に多様な名詞句に後接し、接尾辞的な様相を呈し始めている。「状態」を後項とする複合語は『太陽』と『アエラ』とでは、語彙的にも文法的にも変質を来している。

2.2. 単純語としての「状態」

単純語の「状態」は大半が連体修飾されており、(4) (5) のように連体修飾されず単独で使用されている例は『太陽』でも『アエラ』でも極めて少ない。『太陽』では4例（単純語全体の約0.6%）、『アエラ』では12例（単純語全体の約2%）のみである。

(4) 維新後は状態が一変した。(太陽 1901.2号)

(5) 貴重な作品を、状態の良いままで保存しようと思えば、展示だってしない方がいいに決まっている。(アエラ 2005.9.19.)

連体部を伴う度合いの高さは上述した複合語後項としての出現数の多さと共に「状態」の自立性の低さを示すもので、両者は軌を一にしている。「状態」は事物の一側面であるから、必ず「何かの状態」であり、「状態」の統語的な非自立性は意味的な非自立性にも一因はあるであろうが、そればかりではない。というのは、『アエラ』で「状態」と同条件で、「状態」の類語である「状況」について調べたところ、単純語の「状況」547例のうち72例（約13%）までが連体部を伴わないで使用されていたからである。単独使用の少なさは「状態」という単語の個性に起因するところも大きいわけである⁷。

先に「状態」を後項とする複合語における前項と「状態」との意味関係を調査した。単純語とその連体部との意味関係も複合語の意味構造に準じて考えることができるが、複合語と異なり、単語という枠がない分、より多様な関係が見られる。単純語とその連体部との意味関係には次のようなものがある。

- ①「近く激変を生ぜんとする状態」(太陽)、「悩みながら手探りで進めている状態」(アエラ)のように、連体部が主名詞「状態」の詳細を表し、連体部が「状態」の下位表現、「状態」が連体部の上位概念という関係にあるもの。連体部と主名詞「状態」のこうした意味関係を複合語の場合と同様に「同格」と呼ぶことにする。
- ②「賀すべき状態」「悲惨なる状態」(太陽)のように、連体部が「状態」の性質や「状態」に対する評価を表すもの。こうした意味関係を複合語の場合と同様に「属性」と呼ぶことにする。
- ③「地面の状態」「我國の状態」(太陽)のように、連体部と「状態」が素材的なレベルで関係しているもの。こうした意味関係を複合語の場合と同様に「素材」とする。これらは複合語と同じく大半は「状態」が連体部名詞の指示対象の一側面であり、広義所属関係にあるものであって、形式上も「名詞+連体助詞「の」+「状態」」であるが、中には、「現下見た状態」(太陽)、「ヒューザーの置かれた状態」(アエラ)のように、連体部が動詞句で表され、「状態」と格関係にあるもの（いわゆる「内の関係」に相当する）も僅かながらある。ただしこれらも「現下の状態」「ヒューザーの状態」のように縮約し得るものである。
- ④「この状態」「如何なる状態」(太陽)のように、「状態」が指示語または不定語で修飾されているもの。こうした意味関係を「指示」とする。
- ⑤「半眠半醒の浅ましい状態」(太陽)、「3年間、一度も利用した形跡はなく、ただ基本料金だけが引き落とされるという不自然な状態」(アエラ)のように、連体部に「同格」と「属性」

の両要素が並列しているもの。「同格+属性」とする。

単純語用法の「状態」とその連体部との意味関係の分布は図3、表4の通りである。単純語のうち連体部を伴うものは『太陽』722例、『アエラ』558例である。

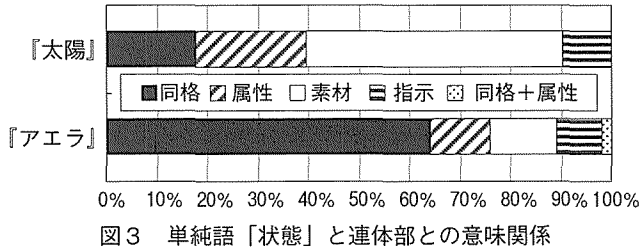


表4 単純語「状態」と連体部との意味関係

	『太陽』	『アエラ』
同格	128	357
属性	157	66
素材	366	75
指示	68	49
同格+属性	3	11

図3、表4に見られる通り、『太陽』における「状態」は約半数が連体部と素材関係、即ち広義所属関係にあるものである。『太陽』で素材関係の次に多いのが「状態」の属性を表す連体部、次いで同格関係の連体部であるが、これはそれぞれ約22%、約18%に過ぎない。一方『アエラ』では同格関係の連体部が約65%を占めており、『太陽』と『アエラ』の分布は大きく異なっている。また、上述したように、素材関係の連体部は大半が「名詞+連体助詞「の」+「状態」」の形式であるのに対して、同格関係の連体部は「動詞句+「状態」」の形式が多い。特に『アエラ』ではその傾向が著しく、同格関係の約80%（284例）が動詞句や連体節である⁸。単純語「状態」とその連体部との関係は内容的にも形式的にも複合語における前項と後項「状態」との関係に並行している。即ち『太陽』に比べ『アエラ』では単純語、複合語とも素材関係、属性関係を表す要素の前接率が減少し、内容を表す同格的な要素の前接率が大きく増加すると同時に、形式的にも重い前要素が多くなっている。

「状態」と同格関係にある連体部は「状態」の一つのあり方を示すもので、範疇表示的「状態」が担う素材的意味は希薄であり、その意味で同格関係の「状態」はほとんど「こと」「の」などの形式名詞に近い。

(6) 純粋な利用回数、時間では元は取れていなくても、会員本人たちが、「元は取れたような気になっている」状態が、理想なのです。（アエラ2007.4.2.）≡ 会員本人たちが、「元は取れたような気になっている」の／ことが、理想なのです。

(7) 困窮が固定化される状態を、森さんは「施設化」と呼んでいる。（アエラ2007.7.23.）≡ 困窮が固定化されるの／ことを、森さんは「施設化」と呼んでいる。

語彙の実質度／形式度を測る基準として、意味の具体性、及び統語的な独立性が挙げられるが、『太陽』との比較において、『アエラ』の連体構造では形式名詞的な「状態」が増加していると言える。

3. 「状態」の統語機能

本節では「状態」及び「状態」を後項とする複合語の統語機能を、以下の8類に分類して比較・考察する。

- ① ガ格⁹ 例：(8) 殊に明治維新後の國家の状態がさうである。(太陽 1909.4 号)
- ② ニ格 例：(9) 當分尚ほ此状態に安んずるの外あらず。(太陽 1909.4 号)
- ③ ヲ格 例：(10) スる御企ても亦、下民の情態を察し給はんが爲なりと承る。(太陽 1909.7 号)
- ④ デ格 例：(11) 内定者には社風を十分理解した状態で、内定式、入社式を迎えてもらいたい。(アエラ 2006.6.5.)

次のようなニテもデ格とした。

例：(12) 植物が種子の状態にて存する間は恰も生機なきに似たるも是れ方に休眠するの時期にして一旦適當なる境遇に會へば忽ち甲拆して芽を發して嫩植物となる。(太陽 1909.6 号)

- ⑤ 述語 例：(13) ただ勉強して成績が伸びること自体が楽しいという状態でした。(アエラ 2005.4.25.)

「述語」には連用節、連体節内の述語も含む。

- ⑥ 主題 助詞の「は」、複合辞の「って」「とは」が後接して主題化しているもの、及び (15) のような助詞を後接しない提示語を含む¹⁰。

例：(14) 一方で久保の状態は、完調にはほど遠い。(アエラ 2006.2.20.)

(15) 海賊の状態、豈これ眞の自由に非ずや。(太陽 1895.9 号)

- ⑦ 複合辞接続 「状態」に「について」「に応じて」「によって」「の中に」「の下に」のような連語的な付属辞が接続するもの。これらを「複合辞接続」とする。

例：(16) 苟も今日の状態を以て憂ふべしと爲す以上は斷じて之を行はざるべからず。(太陽 1901.2 号)

- ⑧ その他 カラ格、ト格、マデ格、引用助詞の「と」に接続するもの、「状態の記述」のように連体助詞「の」を介して名詞に接続するものなどを「その他」とする。

例：(17) けれども之れを州立大學と比較せば、資本は實に豊富なるものにして、州立大學の惘然たる状態と、決して同日の論でない。(太陽 1909.4 号)

結果は図 4、表 5 の通りである。

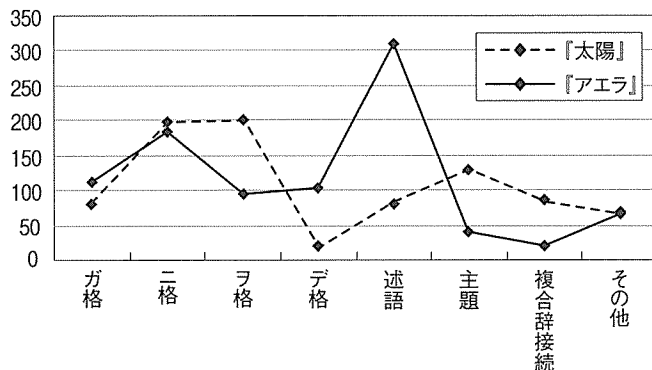


図4 「状態」の統語機能

表5 「状態」の統語機能

	『太陽』	『アエラ』
ガ格	80	112
ニ格	198	185
ヲ格	202	96
デ格	20	102
述語	80	310
主題	128	39
複合辞接続	87	20
その他	70	65

『太陽』で最も多いのはヲ格としての使用で、全体の約23%を占める。ただしニ格とほとんど同率である。『太陽』にデ格が少ないのは複合辞の相対的な多さに関係しており、「によりて」「をもって」「において」などの複合辞がデ格と同等の機能を果たしているためである。また『アエラ』に比して『太陽』に複合辞が多いのは(18)(19)のような文語体の文章の多いことが一因と考えられる。

(18) 彼等は殆ど勤當同様の状態に於て明治十五年に大學を卒業したりき。(太陽 1901.1 号)

(19) 更に上掲十三ヶ國を氣候上の情態によりて六種に區別せり。(太陽 1901.14 号)

『太陽』の「状態」には統語機能で特段に多いというものは見られない。一方『アエラ』では格や主題という名詞の本務を抑えて述語用法が全体の約33%と突出しており、『太陽』の述語用法の約9%と比べて大きな差となっている。

また、格成分「状態」と述語とのコロケーションも『太陽』と『アエラ』とでは趣を異にしている。次節で『太陽』と『アエラ』とで興味深い違いの見られたガ格、ニ格について述べる。

3.1. ガ格とニ格

3.1.1. ガ格

『太陽』では「状態」のガ格80例と結合する述語の異なり数が59であり、「ある／あり」との結合が6例、「斯の如し」「(名詞)の如し」「(動詞)が如し」のような「如し」類の文末との結合が7例見られるほかはコロケーションの偏りは見られない。これに対し、『アエラ』では112例の「状態」のガ格に対して、異なり数は37にとどまるだけではなく、112例中実に53例(約47%)までが(20)のような「続く」との結合であり、述語のパターンに著しい偏りが見られる。「続く」はガ格の「状態」にとって情報量の少ない動詞であり、「続く」への集中は、やがて「続く」を不要として、「状態」が述語化することを予測させる。このことも図4、表5に見られる『アエラ』の述語用法の多さの一因となっているのではないだろうか。図5、表6に示されているのは用例数5以上の述語である。

(20) 2月キャンプから左肩の違和感に悩まされ、春先は大きく肩を回せない状態が続いた。

(アエラ 2005.10.31.)

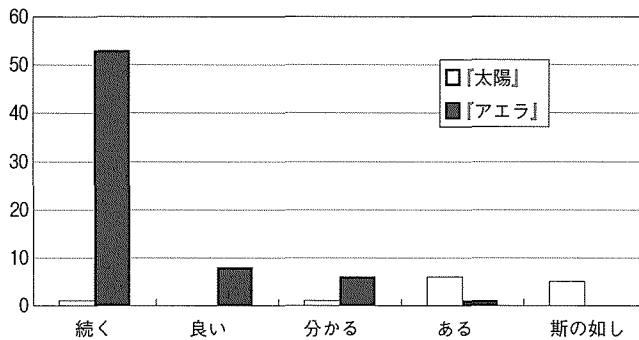


図5 ガ格の「状態」と結合する述語

表6 ガ格の「状態」と結合する述語

	『太陽』	『アエラ』
続く	1	53
良い	0	8
分かる	1	6
ある	6	1
斯の如し	5	0

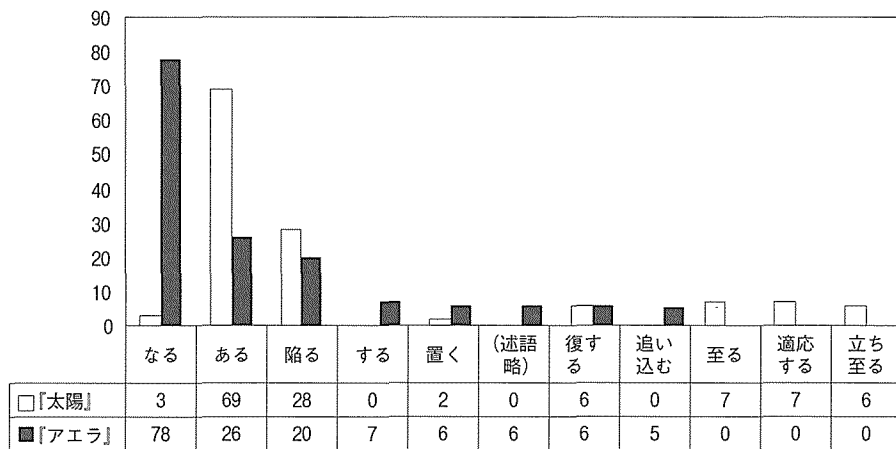
『アエラ』にはほかに「継続する」「維持される」「長引く」「長期にわたる」「長続きする」が計6例用いられているが、『太陽』には「続く」「継続する」が各1例ずつあるのみである。『太陽』では、「続く」系の動詞こそ少ないが、「ある」「備わる」などの存在系の動詞、「復する」「進む」などの変化系の動詞、「異なる」「酷似する」などの比較系の動詞、「斯の如し」「如何なるか」などの提示系の述語、「健全だ」「有利だ」などの評価系の述語など、「状態」は特定の意味範疇に偏ることなく、さまざまなカテゴリーの述語と結合している。『太陽』と比較して、『アエラ』におけるガ格の「状態」には動詞とのコロケーションに固定化の傾向を見ることができる。

3.1.2. 二格

二格の「状態」は、『太陽』では(21)のような「ある／あり」との結合が69例(約35%)と多い。

(21) 吾が國の政客は、政治といふことで手も足も束縛されて、其の範囲外に一歩も超出することが出来ぬ状態にある。(太陽 1909.12 号)

「～状態にある」の「状態」は存在動詞「ある」の二格補語であるが、この「ある」は補助動詞的で実質性の希薄なものであり、「に」と「で」の近接を考えると、「にある」はコピュラに近い。先に『太陽』には『アエラ』に比べて述語用法の「状態」が少ないことを見たが、「～状態にある」という存在文の表現形式が形式的な「ある／あり」を離脱させ「～状態だ／である」と名詞述語に分岐したことが推測される。図表2は用例数5以上の述語を示す。



図表2 二格の「状態」と結合する述語¹¹

一方『アエラ』では「なる」との結合が78例（約42%）と非常に多い。『太陽』における「なる」が3例に過ぎないと比較すると、『アエラ』における「なる」の使用量の増大が注目される。『太陽』でも「陥る」「至る」「復する」「立ち至る」、その他、多様な変化系の動詞が用いられており、変化表現の多いのは『アエラ』と同様である。中でも「陥る」は「ある」に次いで多用されている。変化系の動詞の異なり数が『太陽』では19を数えるのに対し、『アエラ』では8であり¹²、二格の場合も『アエラ』にコロケーションの減少と偏りが生じていることが窺える。

3.2. 述語用法の「状態」

3.2.1. 「状態」を述語とする文の類型

名詞述語文の典型は、「太郎は中学生だ。」のような、主題の指示対象を述語名詞で類別するもの、及び「私が探していたのはこの本だ。」のような、主題に該当するものを述語名詞でそれと指し示すものである。前者を「類別文」、後者を「指定文」と呼ぶことにする。(22)(23)はそれぞれ「状態」を述語とする類別文、指定文である。

(22) 疑惑の國民は、唯私を計るの外を知らず。目前現在の外を見ず。是れ國の進運上、最も不吉の状態也。（太陽 1901.10 号）（類別文）

(23) 近來最も世人の耳目を驚かすことは、伊太利人の活動して居る状態である。（太陽 1909.12 号）（指定文）

しかし、データ中、類別文、指定文は少なく、両方併せて『太陽』に26例、『アエラ』に10例を数えるのみであった。新屋（1989）は(24)の「表情」のように、連体部を必須とし、主語と同値または包含関係にない述語名詞を「文末名詞」、文末名詞を述語とする文を「文末名詞文」と呼んでいる。資料中の「状態」を主述語とする文の大半は(25)(26)のような文末名詞文であった。

(24) 若松は渋い表情だった。（新屋 1989 より）

(25) 佛國現代の小説界は當分停滯の状態である。(太陽 1909.12 号)

(26) このところのマンションブームは、安く買おうとする買い手にこたえようと、徹底的にコストを削る建築主らがいる状態だった。(アエラ 2005.12.5.)

図 6、表 7 に示すように、「状態」の文末名詞用法は、『太陽』で「状態」の述語用法のうち約 64% と多く、類別文や指定文の述語用法を圧倒しているが、『アエラ』においてはその傾向が更に顕著で、文末名詞が約 97% と、述語としての「状態」のほぼ全体を覆うほどになっている。

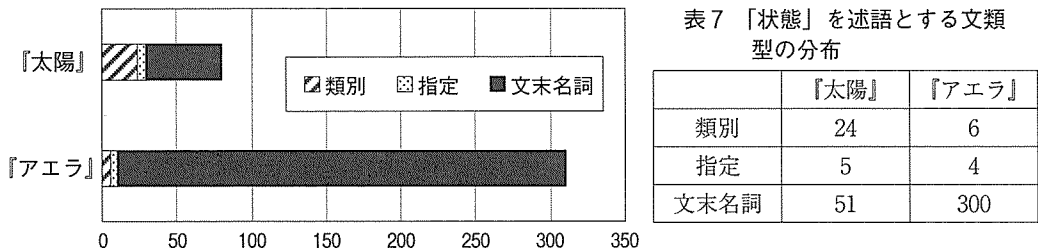


図 6 「状態」を述語とする文類型の分布

文末名詞「状態」を述語とする文には、述定の対象が先行文脈にあり、しかも明示されていないものが多いが、『太陽』の文語文には先の (22) のように先行文脈を代名詞「是(れ)」「其れ」などで受け、文末の「状態」と主述関係を構成しているものが 11 例ある。それらは主述が包含関係にある一般的な名詞述語文(類別文)であり、「是(れ)」「其れ」などの代名詞の存在が一文を類別文か文末名詞文かに振り分ける分岐点となる。『アエラ』に (22) のような構文が見られないことから、文末名詞文の増加の背景には、(22) のような類別文から主語代名詞が捨象されるという構文変化をもたらす事情のあったことが窺える。

文末名詞というのは、対象(主語ないし主題または文脈内に示されている事物。明示的な場合も非明示的な場合もある)に対する叙述が文末名詞で示されている側面からのものであることを示すものである。述定内容の中心は文末名詞の連体部にあり、文末名詞は連体部の上位概念として述定の意味的な枠組みを示すものに過ぎない。(25) を例に取れば、述語「状態」は主題である「佛國現代の小説界」とではなく、「状態」の連体部「停滯」と意味範疇を同じくしている。こうした事情は「状態」を後項とする複合語の場合も同様である。(27) の「鈴なり状態」、(28) の「追い込み状態」の「状態」は複合名詞の後項であるから「状態」だけを取り出して文末名詞というわけにはいかないが、これらの「状態」も機能的には文末名詞と同等である。(以下、記述の便宜上、複合語後項の「状態」を含め、一律に「文末名詞」と呼ぶことにする。また、「状態」が主節の文末名詞として用いられている文を「「状態」文」と略称することとする。)

(27) 8つのテーブルはあつという間に鈴なり状態。(アエラ 2006.1.30.)

(28) 北海道に住む 29 歳の男性は、11 月の行政書士試験に向けて追い込み状態だ。(アエラ 2006.8.28.)

先に単純語の「状態」も複合語後項の「状態」も、『太陽』に比較して『アエラ』では同格関

係にあるものが多いことを見たが、『アエラ』の中でも「状態」文の述語用法ではその傾向が一層強い。中には下の例のように「指示」(29),「属性」(30),「素材」(31)の関係にあるものもあるが、単純語が複合名詞後項かにかかわらず、表8に示すように文末名詞用法の大半(約87%)が連体部と同格関係にある。述語用法、即ち文末名詞用法の「状態」の増加は同格関係にある前接要素の増加にはかならない。

(29) オタク男子にそれなりに歩み寄っている酒井さんですら、この状態なのだ。(アエラ 2005.8.25.)

(30) 対中国関係は国交正常化以来、最悪の状態だ。(アエラ 2005.4.25.)

(31) その後外遊はなく、国内ニュースもビデオ映像はなく、どんな健康状態なのかは判然としない。(アエラ 2006.10.23.)

表8 文末名詞用法の「状態」と前要素との意味関係

	同格	属性	指示	同格 + 属性	素材
『太陽』	33	8	9	1	0
『アエラ』	261	18	9	7	5

3.2.2. 「状態」を文末名詞に持つ文の表現機能

3.2.2.1. 「状態」の省略可能性

類別文、指定文は意味機能の上で述語が名詞句であることを必須とする構文であるため、述語名詞を省略すると命題の意味構造が変わってしまい、指定文の場合は不適格文になってしまう。これに対し、「状態」文では「状態」を省略しても命題の意味構造は保持される。(32a)は類別文、(33a)は指定文、(34a)は文末名詞文である。

(32a) 息をブロックするのは、悪い『気』がたまっている状態。(アエラ 2007.1.29.)

(32b)? 息をブロックするのは、悪い『気』がたまっている。

(33a) 近來最も世人の耳目を驚かすことは、伊太利人の活動して居る状態である。(太陽 1909.12号)

(33b)* 近來最も世人の耳目を驚かすことは、伊太利人が活動して居る。

(34a) 久保竜彦は、所属する横浜F・マリノスでならし運転をしている状態だ。(アエラ 2005.11.28.)

(34b) 久保竜彦は、所属する横浜F・マリノスでならし運転をしている。

「状態」文における述定の内実は「状態」ではなく、その連体部によって与えられており、「状態」は連体部の範疇表示に寄与するのみで、文構造に必須の成分ではない。文末名詞としての「状態」に関する限り、命題構成成分としての意味機能は二次的なものと言える¹³。では、文末名詞「状態」を伴う文と伴わない文との意味的な差はどこにあるのであろうか。また、命題構成に必須とは言えない「状態」がこのように多く使用されているのはなぜであろうか。次節で考えてみたい。

3.2.2.2. 「状態」を述語とする文のテキスト的機能

3.2.2.2.1. 事象叙述と認識叙述

(35) (36) それぞれの a と b を比較してみよう。

(35a) 現地で真っ先に気になったのは、隊員たちの表情だった。笑顔がない。日焼けして頬がこけて精悍だが、無表情。仕事中は余計な口は一切きかず、食事中も私語がほとんどない。怒りっぽくなった人もいた。緊張と疲労が蓄積している状態だった。(アエラ 2005.3.14.)

(35b) ……緊張と疲労が蓄積していた。

(36a) 移転から半年後の 05 年春ごろから腰痛を訴え、目には黄疸が出始めた。それでも厨房に立ち続けて、検査を受けたのは、8 月だった。47 歳の時に手術した胃がんが転移していた。肝臓など数カ所に腫瘍があり、手の施しようがない状態だった。(アエラ 2006.9.11.)

(36b) ……手の施しようがなかった。

(35b) (36b) はそれぞれ「緊張と疲労が蓄積していたこと」、「手の施しようがなかったこと」という事実を客観的に述べ、そうした事象の生起自体を情報として伝える文であるのに対し、(35a) (36a) の「状態」文は当該事態に対してそれがどのような“状態”であるのかという認識を述べる説明文である。(35b) (36b) は事象叙述の文、(35a) (36a) は認識叙述の文であって、両者は文の表現機能を異にしている。動詞述語文は事象を時間的なプロセスの中の一コマとして叙述する文であるのに対し、名詞述語文は基本的に時間性を捨象して述語と明示的・非明示的な対象との結びつきを述べる文であり、その文脈の意味も同一ではない。佐藤 (2001) は「一般に、動詞述語文は記述的なテキストのなかに使用され、ものがたりのすじをくみだてるという役わりをにないながら、そのおおくが、時間の観点から、継起的な、同時的な、あるいは後退的なむすびつきをつくっているのに対して、名詞述語文は、時間軸上への位置づけの義務から相対的に解放されているがゆえに、基本的には解説的なテキストのなかに使用され、そのおおくが《説明的なむすびつき》をつくっている。」と述べている (p.69)。端的に言えば、動詞文の典型は描写文、名詞文の典型は判断文である。「状態」文は事態を「状態」という上位概念で判断する。「状態」をも包摂するさらに上位の概念で事態を判断するものがいわゆるノダ文であろう。

「状態」文の判断の対象は時間的なプロセスの中にある“事態”である。名詞述語文ではあるが、述定の対象はモノではない。従って (37) (38) のような「状態」文は不適格となる。

(37) *彼は親切な状態だ。

(38) *日本は島国である状態だ。

「状態」文は当該事態を文脈の中に一つの判断・認識として提示するものであるから、通常文章の冒頭に来ることはない。「状態」文の機能を考えるということは「状態」文によって加味された判断・認識の意味を問うことにほかならない。では、その意味とはどのようなものであろうか。

3.2.2.2.2. ネガティブな表現性

「状態」文を観察してすぐに気が付くことは、(39) - (41) のようにネガティブな情報を提示するものが非常に多いということである。

(39) 関係者によると、北米事業から撤退するには、工場閉鎖に伴うものだけでなく、北米の販売店への支援分も含めれば損失が8000億円に達する、という試算があるからだ。これだけの巨額ロスを吸収する体力はいまの三菱自動車にはない。退くに退けない状態なのだ。(アエラ 2005.4.25.)

(40) きつい仕事だと地元の人に思われてしまって応募は期待できない状態です。(アエラ 2005.6.6.)

(41) それが96年の九州場所を目前に、貴は稽古で背中を痛めて四股も踏めない状態だった。だれもが出場は無理だと思ったが、それでも貴は「出る」と言い続け、親方は折れた。(アエラ 2005.6.27.)

これらの「状態」文は、事態を評価したり (39)、因果関係にある事態を提示したり (40)、裏付けとなる具体的な事実を示したり (41) して前後の文脈に説明を与えている。「状態」文のこうしたテキスト的機能に共通するのはネガティブな表現性である¹⁴⁾。図7、表9は「状態」文、及び文末名詞用法の「状態」を述語に持つ従属節について、内容がポジティブか否かという観点から表現性を調べたものである。(表中の「その他」はポジティブでもネガティブでもないもの)

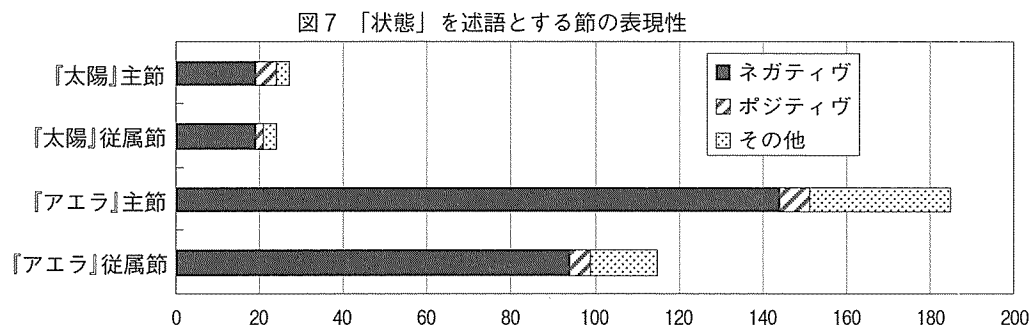


表9 「状態」を述語とする節の表現性

	『太陽』主節	『太陽』従属節	『アエラ』主節	『アエラ』従属節
ネガティブ	19	19	144	94
ポジティブ	5	2	7	5
その他	3	3	34	16

図7、表9に見られるように、『アエラ』における述語用法の「状態」のうちネガティブな表現性を帯びて用いられているものは主節、従属節を問わず80%前後の多きに及んでいる。『太陽』の場合も、「状態」文の絶対量が少ないので明らかなことは言えないが、『アエラ』に比して

相対的にポジティブな文が多いとはいえ、ネガティブな表現性に傾いていることが窺われる¹⁵。命題の客観的な意味に寄与するところのない「状態」が文末に付加されるという統語的な有標性はこうしたテキスト的な有標性に支えられている。

「状態」の類語の一つに「有様」がある。「有様」は(42)のようにネガティブな意味合いで用いられることが専らであり、語彙レベルでかなりマイナスイメージの焼きついている語である¹⁶。

(42) 「改革、改革と競い合っているんだからおめでたい」 党の有力者でさえ、そんなふうに冷笑するありさまだ。(アエラ 2005.12.19.)

『新明解国語辞典』第6版には「有様」の語釈として「動かしがたい事実としてとらえられた、物事の状態。[多く、ひどい事態だととらえた場合に使われる]」とある。「有様」に比べると「状態」という名詞自体の意味はニュートラルであり、同辞書の語釈にも「われわれが見たり聞いたりさわったり感じたりすることが出来る物事を、一時点で切り取ってとらえた時の、形や性質のありかた。」とあるのみであるが、上述したように大半はネガティブな意味合いで用いられているというのが「状態」の実態である。間接受身の帯びる被害の意味合いほどには明確ではないものの、「状態」文の持つネガティブな意味合いも構造的な特徴と言える段階に幾分か近づきつつあるのかもしれない。

また『アエラ』には、量的には多くはないが、(43) (44) のように、程度の大きさや切迫性、特殊性など、ただならぬ事態にあることを表すものが23例あり、ネガティブな表現性と共に「状態」文の意味を特徴付けている。こうした表現性は『太陽』には見られない。

(43) 千葉県市川市の3LDKの自宅マンションの壁にはずらりと絵がかかり、書斎は天井まで絵が詰まっています、入ることすらできない状態だ。(アエラ 2005.3.14.)

(44) このダウン、今期は特に異常な人気らしい。男性向けだけでも約60パターンあるが、中でも「K2」や「エベレスト」と呼ばれる人気モデルは、価格が7万～10万円と決して安くはないものの、入荷すると即完売という状態だ。(アエラ 2007.1.1.)

3.2.2.2.3. 例示機能

2.1節で「状態」を後項要素とする複合語の比喩表現に言及したが、文末名詞としての「状態」の場合も同様である。「状態」文は当該事態に対する認識を表わすものであり、認識が(45a) (46a) のように比喩の形を取るのとは自然なことであろう。

(45a) タケオさんは東京出身だが、同郷の方言をふと聞いてグッときたという男性もいた。こうなるともう、上野駅の石川啄木状態である。(アエラ 2005.8.29.)

(46a) いまの自民党は、お父さんが家にガソリンを撒いて、言うことを聞かないと火をつけるぞと脅している状態だ。(アエラ 2005.8.1.)

このような比喩表現を連体部に持つ文末名詞「状態」は、(45a) (46a) が(45b) (46b) にそれぞれ対応していることから明らかなように助動詞「ようだ」と互換性を持っている。

(45b) ……こうなるともう、上野駅の石川啄木のようである。

(46b) いまの自民党は、お父さんが家にガソリンを撒いて、言うことを聞かないと火をつけるぞと脅しているようだ。

従って連体部と「状態」の間に介在する(47)(48)の「ような」はリダグダントである。また、(49)の陳述副詞「まるで」は「状態」と呼応している。こうした現象は「状態」が機能語的な性質を帯びていることを示している。

(47) 夫は仕事で忙しいので、いつも母子家庭のような状態。(アエラ 2006.8.28.)

(48) 歯磨き粉のチューブを最後まで絞りきってるような状態だった。(アエラ 2007.8.13.)

(49) まるで「時限爆弾」を抱えてどうにもならない状態だった。(アエラ 2005.2.21.)

『アエラ』では「状態」を主節の述語とする文の25%までが比喩表現を連体部に持つが、このような比喩表現の例は『太陽』にはなく、『アエラ』の「状態」文における表現の広がりを見ることができる。

4. まとめ

『太陽』と『アエラ』という、約1世紀の時を隔てて刊行された2種類の総合雑誌を資料に「状態」という名詞の様相を調査・考察した。資料も調査対象年代も限られている上、『太陽』は月刊誌であるのに対し『アエラ』は週刊誌であり、『太陽』のデータの57%は文語文という、資料としての性質の異なりもあるため、本稿の結果を直ちに一般化することはできないが、両誌の比較を通して見る限り、「状態」は語構成要素として接辞的、文構成要素として機能語的性格を強めていると言える。自立的な語彙項目が歴史の中で文法機能を帯び、付属語となる変化を文法化という。文末名詞としての「状態」は、実質的な意味は保持しつつも、自立性を失って、文に一定の表現性を加味する成分であり、上述のようにある種の文法形式との互換性も有している。その意味で文末名詞「状態」も文法化の周辺に位置づけられるかもしれない。井手(1967)は「一人」「一匹」のような数詞や「こいつ」「これ」「ここ」などの指示語も範疇表現として指摘し、「形式名詞による範疇の表現によって代表せられるような、国語における範疇表現重視の傾向は、国語の表現における一特性とみてよい」(p.46)とし、また「の」「もの」などは使用範囲の拡大に伴って、「意味が希薄化、形式化して一定の範疇を表示しえなくなっている」(p.50)と述べている。文末名詞「状態」は「の」「もの」のように語彙の意味を漂白させてはいないが、形式名詞に連続的であることは明らかである。島田(2003)はありさまや様子そのものを意味する体言を「サマ名詞」と呼び、「通時的サマ名詞論」として「コトをサマで捉え直す表現様式」への転換を示唆している。また、近年日本語に関して、コトを名詞的に把握するという意味での名詞中心性を指摘する論考も散見される¹⁷。「状態」文の増加も、日本語のそうした特性のひとつの現れとも見られる。「状態」は動態に対立する命題の下位範疇を語義として持つ、内包の希薄な名詞であり、連体部に示された命題の範疇表示を専らとしている。「状態」の語彙的、文法的変容はこうした「状態」の語義に加えて、明治以降の近代化の中で抽象的な漢語が汎用されるようになり、定着していったという時代的な背景も与って力あったのではないだろうか¹⁸。また、文末に

おける「状態」の付加が、ネガティブな表現性や尋常ではないという表現性に支えられていることも見逃してはならない。Traugott(1989)は、話者の主観的解釈が歴史の中でその語句の意味に取り込まれてしまう現象を「語用論的強化 (pragmatic strengthening)」と呼んでいる。本来ニュートラルであるはずの「状態」が述語として働く時に持つ一定の意味合いが定着しつつあるのも語用論的強化を経てのことであろう。

『太陽』との比較における相対的な結果として『アエラ』の「状態」の用法をまとめると、以下ようになる。

- ① 単純語としての「状態」が減少し、複合語の後項要素となる率が高くなっている。と同時に、前項要素は極めて多様化している。
- ② 連体部も複合語の前項要素も主名詞「状態」と同格関係にあるものの率が高くなっており、「状態」は前接語句の範疇表示的な要素となっている。
- ③ 統語的には名詞本来の機能である格成分よりも述語、特に文末名詞として機能するものが増えている。それらは命題表示に必須の成分ではなく、機能語的な性質が強くなっている。
- ④ 「状態」を述語とする文は出来事を表すテキストの中で一定の表現性、特にネガティブな情報を提供する説明文として機能する傾向が顕著になっている。

小論は「状態」という一個の名詞に焦点を当てたものであるが、個別的な観察から見てきたものの広がりはいくらか大きい。類語である「状況」「事態」「事実」などとの比較を含め、さらなる追究は今後を期したい。

注

- 1 『日本国語大辞典 第二版』の「じょうたい〔状態・情態〕」の項目には「古活字本毛詩抄(17世紀前)一四「小人が酒をのまぬ時はつつしうて殊勝がをををしているが酔たれば情態と云は根本の本姓がみゆるぞ」という例が挙げられており、古くは「情態」の語義が異なっていたことが察せられる。『太陽』にはそのような意味で用いられた例はなかった。
- 2 「状態」が中項である「経営状態悪化」「抑うつ状態調査」(いずれも『アエラ』)の2語もこの中に含めることとする。
- 3 『太陽』に使用度数6の「ガス状態」という複合語もあったが、これは同一著者による専門的な文章内のものであるため、考察対象から除外した。
- 4 「お祭りワッショイ状態」の前項要素は名詞+感動詞である。名詞以外の前項を持つこのような複合名詞は増加しているのではなかろうか。筆者は最近「ヤット・マニ・アッタ・ジョウタイ(圈点部が高音)」のように一語化して発音されたのを耳にしたが、会話においてはこのように「状態」を名詞に限らず後接させて、複合語的に用いる現象も出現している。同様の現象は、例えば接尾辞「ばい」が近年「もう時間になったっばい」「これ腐ってるっばい」(大学生の発話から採取)のようにならかなり自由に様々な表現に後接して用いられるのに似ている。

因みに読売新聞のオンライン記事データベース『ヨミダス文書館』で2007年9月1ヶ月分の記事に見られる「状態」の用法を調べたところ、全430例中、臨時一語と見られるユニーク

な例は「屋根のあるホームレス状態」「作業そっちのけ状態」「ドロドロ状態」「トロトロ状態」などの数例に過ぎなかった。『アエラ』に臨時一語が多いのには、週刊誌という特性に起因するところも大きいであろう。

- 5 『アエラ』において前項要素が「状態」の「属性」を表す6例はすべて「極限状態」であった。
- 6 比喩表現の場合、前項要素、ないし複合語の前後が「」, “” などの符号でマークされているものが多い。
- 7 『太陽』には「状況」が8例しかなく、それらはすべて「名詞＋連体助詞「の」」という連体部を伴っている。
- 8 『太陽』では同格関係の連体部の約60%（77例）が動詞句であった。
- 9 ガ格と認定した中には、格助詞「が」が省略されているものも、係助詞「も」が用いられているものもある。
- 10 述部が「状態」に関する判断や感想を表現している場合、及び一文が措定文とみなされる場合の「状態」は主題とした。
- 11 表中「述語略」とあるのは、「地震で玄関のドアが変形し、ノブも取れた状態に。」（アエラ2005.5.2.）のように「～状態に。」で文が終止しているものである。
- 12 『太陽』には「達する」「移る」「止まる」「向かう」「入る」「経過する」「回復する」「低落する」「到達する」「迫る」「挽回する」などが、『アエラ』には「近づく」「入る」「進む」「移行する」「向かう」などが見られる。
- 13 下の例のように「状態」文の英訳に「状態」に対応する部分が見られないのも、「状態」の省略可能性を裏付けている。いずれも読売新聞社説とDaily Yomiuriの対訳による。

・だが、最近は何価、賃金とも改善が足踏み状態だ。／However, recently prices and wages have not improved as much as expected. (2007.5.18)

・主要漁場は、韓国漁船が我が物顔に占拠し、日本漁船は締め出された状態だ。／The main fishing ground in the area has been dominated by South Korean fishing boats, which have driven out Japanese fishing boats. (2005.3.17)

ただし多くの場合、「頭の中のハードディスクは常に満杯の状態。」（アエラ2005.10.24.）→「頭の中のハードディスクは常に満杯だ。」, 「同親王の将来は宙に浮いた状態だ。」（アエラ2007.1.1.）→「同親王の将来は宙に浮いている。」のように、「状態」を省略すると形態的な調整が必要になる。

文末名詞としての「状態」が省略可能であるのは、それが文末名詞であるためではない。「彼は私の返事を歓迎している様子だ。」の「様子」は文末名詞であるが、省略すると元の意味が精確には伝わらない。また、量的には少ないが、文末名詞が「状態」であっても連体部との意味関係によっては省略することができないものがある。例えば「病気というより、少しおかしな心の状態なんではないでしょうか。」（アエラ2005.4.11.）における「心」と「状態」は素材的な関係で結合しており、「状態」が実質的な意味を付加しているため、省略できない。さらに「売上高を維持し、トントんに持っていこうという状態だ。」（アエラ1989.10.3.）のように連体部が引用形式の場合も「状態」を省略すると内容に齟齬を来し、文の終止形式としても不適格となるため、省略できない。

- 14 「胃かいようで入院を繰り返している今年、体力不足の大統領は教書の原案ですら、最近やっと読み終わったような状態だ。」（アエラ1999.3.15.）「商品の通関からデリバリーのフォロー、仕入れ・売り上げの経理処理など、作業量も多く神経を使う仕事です。部長席の秘書的な業務

も兼務しているので、1 度に 5～6 コの業務を処理しているような状態。」(アエラ 2007.7.30.)
のように、連体部と「状態」との間に例示的な「という」「といった」「ような」などを介在させて連体部を特立させると、ネガティブな表現性が強調される。

- 15 『アエラ』では主節、従属節内の述語だけでなく、述語以外の「状態」も約 61% がネガティブな文に用いられている。『太陽』で述語以外の「状態」がネガティブな文に用いられている割合は約 21% であった。
- 16 「有様」がネガティブな意味合いで用いられることについては、新屋 (1989: 78), 新野 (2007: 13) などでも言及されている。語の中立的な意味がプラス化あるいはマイナス化することについては、小野 (1984, 1985a, 1985b, 2001a, 2001b), 新野 (2007) など、各論、総論に亘る興味深い研究がある。小野は一連の論考で、体言が形容動詞的に用いられることによって評価的な性質を帯び、本来の中立的な意味がプラス化あるいはマイナス化すると述べているが、これは「状態」における文末名詞用法の獲得とネガティブな意味合いとの関係をも示唆しているように思われる。ただし「状態」の場合、それ自体の意味は中立である。
- 17 井上・金 (1998), 林 (1995), 金 (2003), 新屋 (1989) など
- 18 因みに 1875 年刊行の『文明論之概略』を見てみると、「状態」「情態」の使用は見られず、類義の「有様」が 153 例使用されている。(インターネット上で公開されている上田修一氏作成のコーパスにより調査) また、国立国語研究所が 1994 年発行の月刊雑誌 70 誌を対象として行った語彙調査によると、全 59223 語中「状態」の使用頻度は 426 位、「様」(さま：様子の意) 7229 位、「有様」13864 位となっている。『文明論之概略』と雑誌とでは資料としての性質が異なるため一律に論じることとはできないが、「状態」が現代にかけて使用されるようになってきたことを窺わせる。

参考文献

- 井手至 (1967) 「形式名詞とは何か」松村明他編『講座日本語の文法 3 品詞各論』, 37-52, 明治書院
- 井上優・金河守 (1998) 「名詞述語の動詞性・形容詞性に関する覚え書—日本語と韓国語の場合—」筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究組織編『筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究報告書』, 455-470, 筑波大学
- 林八龍 (1995) 「日本語と韓国語における表現構造の対照考察—日本語の名詞表現と韓国語の動詞表現を中心として—」宮地裕敦子先生古稀記念論集刊行会編『宮地裕敦子先生古希記念論集 日本語の研究』, 264-281, 明治書院
- 小野正弘 (1984) 「「因果」と「果報」の語史—中立的意味のマイナス化とプラス化—」『国語学研究』24, 24-34, 「国語学研究」刊行会
- 小野正弘 (1985a) 「中立的意味を持つ語の意味変化の方向について—「分限」を中心に—」『国語学』141, 28-38, 国語学会
- 小野正弘 (1985b) 「「天気」の語史—中立的意味のプラス化に言及して—」『国語学研究』25, 11-27, 「国語学研究」刊行会
- 小野正弘 (2001a) 「意味変化の形態的指標となるもの」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』20, 11-22, 和泉書院
- 小野正弘 (2001b) 「通時的主導による「語彙」「語彙史」」『国語学研究』40, 1-11, 「国語学研究」

刊行会

- 金恩愛 (2003) 「日本語の名詞志向構造 (nominal-oriented structure) と韓国語の動詞志向構造 (verbal-oriented structure)」『朝鮮学報』188, 1-83, 朝鮮学会
- 佐藤里美 (2001) 「テキストにおける名詞述語文の機能－小説の地の文における質・特性表現と〈説明〉－」『ことばの科学 10』, 67-116, むぎ書房
- 島田泰子 (2003) 「修飾されたサマ名詞による様態の描写と規定をめぐって－総論並びにサマ名詞表現通史への展望として－」『香川大学国文研究』28, 109-118, 香川大学国文学会
- 新屋映子 (1989) 「“文末名詞” について」『国語学』159, 88-75, 国語学会
- 新野直哉 (2007) 「“ていたらく” の《気づかない変化》について－「ていたらくな自分」とは?－」『国語学研究』46, 1-15, 「国語学研究」刊行会
- 林四郎 (1982) 「臨時一語の構造」『国語学』131, 15-26, 国語学会
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- Traugott, Elizabeth Closs. 1989. On the rise of epistemic meanings in English: an example of subjectification in semantic change. *Language* 65, 31-55.
- 『新明解国語辞典 第6版』三省堂, 2005
- 『日本国語大辞典 第二版』第7巻, 小学館, 2001

用例出典

- 『太陽コーパス』(1895年, 1901年, 1909年発行分) 国立国語研究所作成 CD-ROM
- 『アエラ』(2005年1月1日から2007年9月30日までの発行分) 朝日新聞社オンライン記事データベース『聞蔵』による。
- 福澤諭吉 (1875) 『文明論之概略』全文テキスト www.slis.keio.ac.jp/~ueda/ による。
- 『ヨミダス文書館』(読売新聞オンライン記事データベース)

謝 辞

本稿を成すに当たり、査読委員の方々に有益なご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

(投稿受理日: 2008年3月12日)

(最終原稿受理日: 2008年7月29日)

新屋 映子 (しんや てるこ)

桜美林大学言語学系

194-0294 東京都町田市常盤町 3758

shinya@obirin.ac.jp

Usage of the noun *jôtai* in general-interest magazines:

The change in the last 100 years

SHINYA Teruko

J. F. Oberlin University

Keywords

jôtai, simple word, compound word, sentence-final noun, textual function

Abstract

This paper is a diachronic study on lexical, syntactic and textual features of a Japanese abstract noun, *jôtai* (a state of things/condition/situation), utilizing two general magazines as the source of analysis. One is “Taiyo” issued in 1895, 1901 & 1909, and the other “Aera” issued on Jan. 1, 2005 through Sept. 30, 2007. Moreover, its most central usage for today is also explored in “Aera.” My findings are as follows:

1) In “Aera,” *jôtai* is used as a head noun of a compound word much more often than in “Taiyo.” At the same time, modifying elements of compounds are very much diversified.

2) In “Aera,” the relationship of the head *jôtai* to the elements of a compound as well as its modifying clauses is mostly appositive and has become a suffixal factor indicating the semantic category of the preceding element, while in “Taiyo,” the relationship is mostly relative.

3) *Jôtai* in “Aera,” mainly functions as a “*bunmatu meisi* (sentence-final noun),” while in “Taiyo,” a complement. *Jôtai* as a sentence-final noun is not an indispensable factor for a propositional meaning. Because the lexical meaning of *jôtai* is a subcategory of proposition, it does not add substantial meaning to the appositive modifiers.

4) In the texts explaining certain events, sentences with *jôtai* placed at the end have a prominent tendency to function as explanatory sentences that provide constant expressiveness, especially negative information.

This research suggests that *jôtai* is in a process of transforming from a substantial word to a functional one.